



## 心を通わせる直売所K

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

週末農業で東京から山梨市牧丘町に通っているが、竹やぶを開墾し畑にして丸30年が経過した。おかげで畑仕事に親しむとともに、ご近所だけでなく地元のお店などの付き合いも広がっている。

畑から車で5分ほどの国道140号沿いに、直売所のKがある。果実の直売所につき晩秋から春の間は閉じ、モモが出始める6月下旬から再開して、リンゴが並ぶ11月ぐらいまで開く。小さな直売所ではあるが、何しろ“目利き”で味が外れることはめったになく、しかも値段が手頃であるだけでなく、何個もおまけを付けてくれる。おばさん店主が個性的であることも手伝って常連客は多い。すぐ横には別の何倍も大きな直売所もあるが、客の入りが違う。特にモモの最盛期である7月の半ばにもなると、中央道から雁坂トンネルを越えて秩父に抜ける大型トラックがKの前に並び、段ボールで何箱も購入していく。トラックの運転手は毎年、ここで買ったモモを同僚や普段お世話になっている人たちに配るのを慣例にしているらしい。

販売はおばさん、売り物の手配・運搬はおじさんと夫婦で分担し、モモの最盛期などの忙しいときには娘夫婦が販売を手伝う。そして今年も6月下旬にKは開店し、モモが並ぶようになった。おじさんの顔が見えないので元気かなと気になって聞いてみたところ、今年の2月に亡くなったとのこと。お酒を飲んでいる時に倒れてすぐに入院。4日目に亡くなられたそうだ。おじさんは寡黙な方で、よくしゃべるおばさんとは正反対。いつも穏やかな笑顔で、しゃべる時はいかにも恥ずかしそうに話す表情に人柄がにじみ出る。あちこち体に疾患を抱えていたが、一昨年、捕獲したマムシを一升瓶に入れておいたものが、一升瓶の口を開けて頭を出したマムシに手をかまれてしまった。それこそ毒が回って体が腫れ上がるなどしばらくは大変であったが、それも回復してある程度元気を取り戻したところで冬を間近にして店じまいとなっていた。



国道140号沿いにある直売所K

おじさんは入院したものの激痛にさいなまれて苦しみ続けたそうだ。そのあまりに苦しむ様子がかわいそうで、延命治療はしないことをおばさんは決断。4日目に、コロナ対策から家族が一人ずつ病室でおじさんとお別れをしてしばらくして、おじさんは安らかに旅立ったそうだ。おじさんが亡くなって約5カ月。この間、おばさんはほんの少し前まで、延命治療を断ったのが本当に良かったのかどうか、ずっと悩むとともに後悔の念にさいなまれ続けたという。

気持ちの整理がついたのは直売所の開店を目前にしたこと。おばさんは78歳になるがいつも元気な人で、お客には必ず声を掛け、体調の悪い人には自分の経験を伝えたり、元気のない人には励ましたりしながら売り続けてきた。それが開店を前にして、自分が元気でなければどうして人を元気づけることができるのか、と思いついたそうだ。これがきっかけとなって以前の元気を取り戻し、昨年と変わらず店を開けてモモを売り始めた。おばさんは「私には直売所があって本当に良かった」としみじみ語る。励ますことで、自分も元気をもらい、励まされもする。直売所がそうした心と心を通わせる場ともなっていることが何ともうれしい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）

「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など